

町内アイヌ語地名「サンルベシペ」について

今井 真司*

1 はじめに

下川町内には、サンル地区（漢字で珊瑚）という地域がある。場所は下川市街地の北側、名寄川の支流サンル川に沿った地域で、この川沿いに下川と雄武町幌内地区をつなぐ道々60号下川雄武線が通っている。サンル地区への明治以降の入植は明治39年（1906）、前田助兵衛を団長とする岐阜団体が始まりである（1）。その後三井鉱山による金の採掘や、森林資源に恵まれ林業も盛んであったが、平成10年サンルダム建設のため、地域住民は全てこの地を離れた。

本稿では、このサンル地区の歴史の一部として、古文書・古地図よりサンルに関する部分を取上げ、周辺のアイヌ文化の中でのサンル地区についてまとめることにする。

2 「サンル」という地名

現在サンルと呼ばれる地名は、元々、アイヌ語の「サンルベシペ」という地名を由来とし、この前半の三文字を取って「サンル」となった。いつ頃から「サンル」と呼称されたか不明であるが、明治41年（1908）には珊瑚簡易教育所が設立されていることから入植早々には使用されたと考えられる。

「サンルベシペ」というアイヌ語は細分すると、「サン」と「ルベシペ」に分かれる。この意味は、永田方正著「北海道蝦夷語地名解」によると、『San rupeshpe サンルベシユペ 沙留越 北見ノ沙留へ下ル路』（2）と記されている。沙留とは現在の興部町沙留地区のことであるが、現在の地図で確認するとサンル川を越えた先の河川は雄武町幌内川か音稲府川で沙留とは方向かなり離れている。（図1）

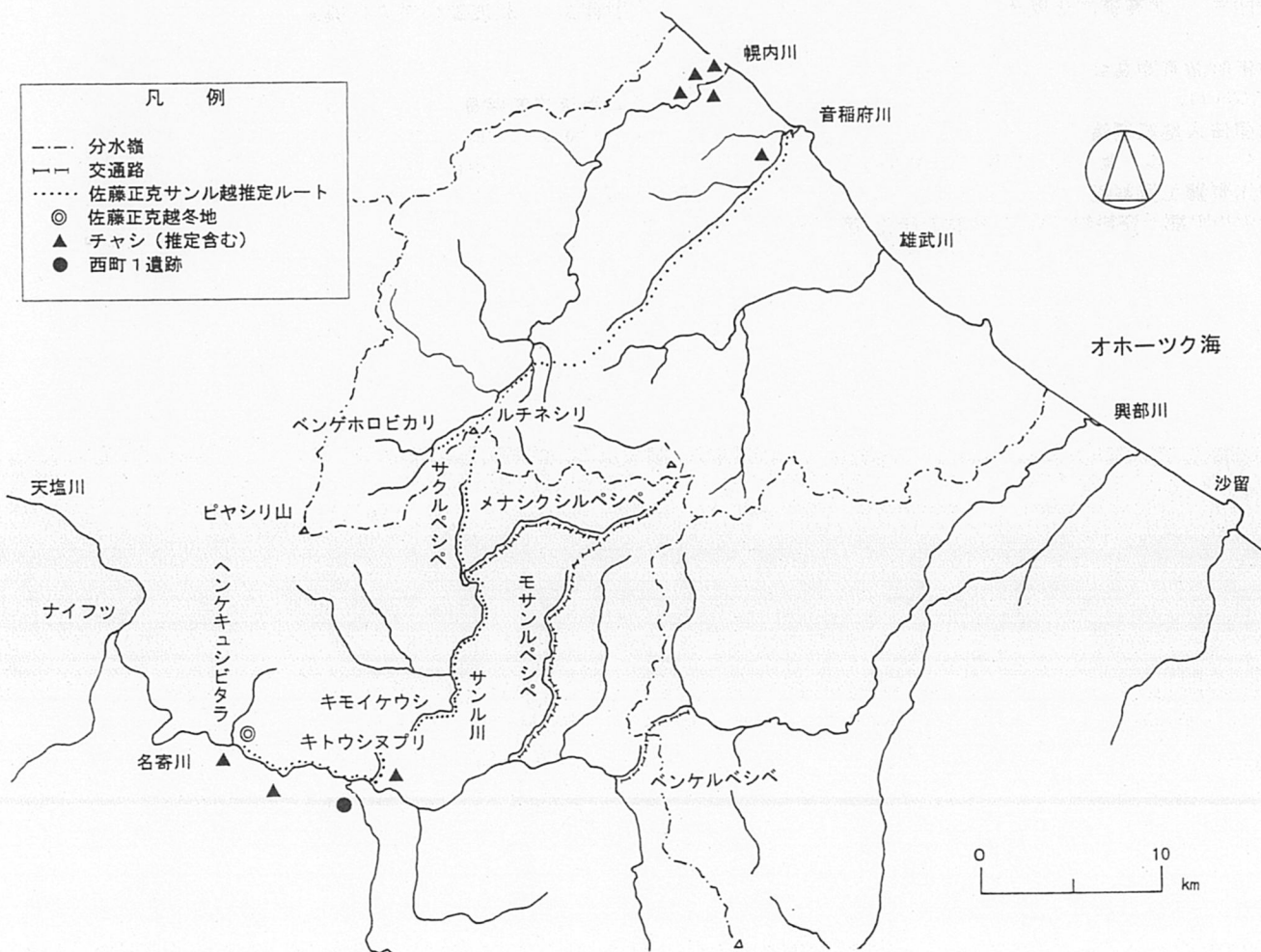


図1 サンル川周辺略図

このことについて山田秀三著「北海道の地名」では『語義は sar - rupeshpe (沙留・峠道沢) で、sar が、後の語の r との関係で san となったもの』と説明し、更に地名がついた由来については、『沙留と何か特殊な関係でこう呼んだのであろうか』(3) と推測している。

また知里真志保著「地名アイヌ語小辞典」では、『san サン』(4) とは『①山から浜へ出る。②後から前へ出る』ことを意味し、『ru-pes-pe ルペシペ』(5) とは、『山を越えて向う側の土地へ降りて行く路のある川。(中略) [ru (路) pes (それに沿うて下っている) -pe (者)]』と説明している。また同書では『san-ru サンル』(6) を『浜へ出る道』とも解釈している。これらのことから沙留との関係は不明であるが、一応「サンルペシペ」は「山から浜にでる峠道」と解釈することができる。

サンルを越えた先の河川、雄武町幌内川は『ポロ・ナイ (poro-nai 大きい・川)』(7) の意味で、音稲府川は『オ・トイネ・ナ (中略) O-toine-p 川尻・泥んこである・もの (川)』(8) の意味である。

町内には他のルペシペ地名として、『モサンルベシペ』(現在のモサンル川)、『チヘルベシペ』(不明)、『ベンケルベシペ』(国道 239 号線天北峠沿いの川か?) などがあつた(9)。

3 古文書・古地図での「サンルペシペ」

蝦夷地についての古文書・地図類は江戸時代の後半、19 世紀になってから飛躍的に増加するが、しかし内陸、特に天塩川流域についての記録は少ない。次に上げる史料は中でも、実際に当人が現地を踏査し記録したもので当時のこの地域の実状がよく記されたものである。

①文化 4 年 近藤重蔵作成『蝦夷地図』

幕命により天塩川沿岸を溯り石狩川へのルペシペを踏査した重蔵が、文化 4 年 (1807) に作成した『蝦夷地図』(10) には、ナヨロ川が二股に分かれた左側の沢を『シヤンルベシペ』と記している(図 2)。これはサンル川のこと、現在のところサンル川の地名が記された最古の地図と考えられる。また地図にはサンル川と平行し上流へは『ヲトイツツフ』川(現雄武町音稲府川)を通りオホーツク海沿岸へ、下流へは『ナヨロ』川を通して、『ナイフツ』(名寄川と天塩川の合流点)に通じる『夷人通路』(点線)が記されている。更にこの通路は『ナイフツ』から、北は天塩川河口への道、南は石狩川への道、西は苫前に抜ける道へと続いている。『夷人通路』に平行した実線は重蔵が新道を設置するのに良い道筋として地図に記入した道である。

重蔵は蝦夷地の内陸交通に注目した人物であつた

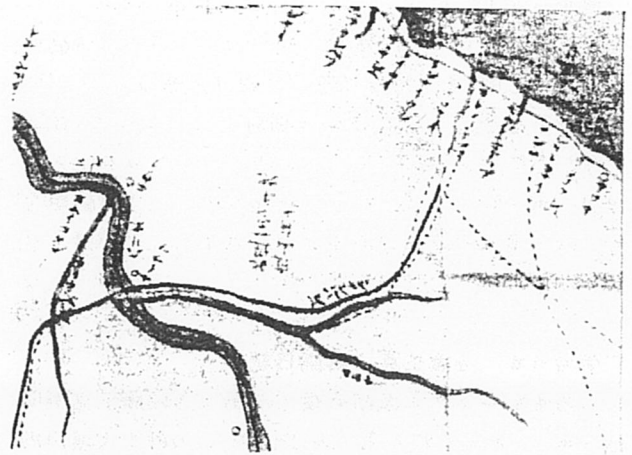


図 2 『蝦夷地図』サンル川部分

ため、地図に『夷人通路』、『新道』のことを記したのであろう。

当時のサンルペシペ周辺のアイヌ集落については、天塩川流域では、ナイフツ(現名寄市内淵)には夷家は無く、天塩川流域全体でも『25ヶ所 34軒が数えられ、13ヶ所については夷家のみで軒数の記載がなく、家人数があるのは3ヶ所のみ』(11)であり、オホーツク海側についても近藤重蔵と共に蝦夷地に赴いた田草川伝次郎『西蝦夷地日記』によると、『一ポロナエ 通行家壹軒 一ヲトエネ 蝦夷家四軒 男女十四人』(12)と幌内川、音稲府川河口にわずかに人家があるばかりであつた。

当時、天塩川筋とオホーツク海沿岸にアイヌ集落が少なかった理由の一つには、宗谷、天売・焼尻、紋別などの漁場での使役のため、多くのアイヌが連れて行かれた事が上げられる。

②安政 4 年 松浦武四郎著「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 下」

幕末における蝦夷地調査の第一人者である松浦武四郎は、安政 4 年 (1857) に天塩川内陸部の踏査を実施しサンル川について次のように書き残している。

『サンルベシペ 左りの方相応の川のよし。此処より堅雪のせつ一日上りて少しの山を越るやソウヤ領ホロナイの源え下るとかや。此辺の土人等はおりゝ越よしなり。(中略) 向う方に丸小屋二つを見たり。よつて是に入見るに、ヌタヘトのケシュラン夫婦と子供に、イソマの妻(ハルラン)とエヘカウシの妻と子供四人来り居りたり』(13)と周辺のアイヌが時折サンルペシペを溯り雄武町幌内川に行くのことや、アイヌの人々が小屋を建て住んでいたことが記されている。彼らはここで食料のトレフ(おおばゆり)の採集やアツシ(アイヌの衣服)の素材になるヲヒヤウ(おひょうにれ)の皮を剥ぐ作業などしていたようである。(14)

当時のオホーツク海沿岸側の記録としては武四郎の

『廻浦日記』⁽¹⁵⁾がある。この中で幌内川については『堅雪之節はテシホ川筋ナヨロと云え、昔しは皆越縁組までせし由、凡雪路を当所より四日も懸るといへり。当時越たる土人なし』、また音稲府川については『此山のうしろにテシホ川ナヨロ辺に当ると、ナヨロ土人は此辺へ越来りし事むかしは有と聞り』と、昔は縁組をするほど多くの往来があったが、近年は往来が無くなったことが記されている。

③明治6年 佐藤正克「關幽日記」

開拓使宗谷支庁天塩詰の役人であった佐藤正克が明治5年10月～6年1月(1872～73)にかけて天塩川内陸部を調査した記録が「關幽日記」⁽¹⁶⁾である。

正克は名寄川の「ヘンケキュシビタラ(現名寄市拓進川河口)」で越冬し、明治6年にサンルベシベを溯り、幌内川を下り、支流の「ベンゲホロビカリ」から山を越え、音稲府川を下りオホーツク海岸に出て北上し天塩に帰着している。日記の内、サンル川に関する部分は、明治5年11月5日のサンル川河口までの調査と翌年1月4日～8日のサンルベシベ越えがある。以下サンル越の部分については、

五日 (中略) 山ヲ下レバ則チ「サンルベシベ」ナリ。則チ古「カモイルベシベ」ニシテ、土地爽澁樹木蕭疎、而シテ四圍皆峻嶺高峰、宛然障屏ヲ環スガ如シ。其際椴山アリ。北方第一ト称ス。行ク■(缺字)里四方ニ「スカナンボフ」ノ諸山ヲ望ムベシ。従レ此数町、地勢幽阻両山相迫り、一水其間ヲ流ル。乃チ所謂「サンルベシベ」河是レナリ。東岸ニ沿フテ行ク数里、「ラフイニイナラ」ニ抵ル。時既ニ午ナリ。乃チ飯ス。又行ク数丁、峻隘益々甚シ。山脚斗絶行クベカラズ。乃チ河氷ヲ踏ミ或ハ西シ或ハ東シ、其兩岸齋シク削峭行クベカラザルニ逢ヘバ則チ河氷ヲ歩ス。如レ此モノ■(缺字)里、「キモイケウシ」ヲ経テ「セウトホイ」ニ至ル。乃チ山漸ク開ク。然レトモ巨樹森鬱人ヲシテ頓ニ懊惱セシム。既ニシテ「ベツチヤリ」ニ至ル。二水■(缺字)方ヨリ来リ河ニ合シ、巨樹漸ク疎ナリ。又行ク■(缺字)、「オトクマトマキ」ヨリ復タ樹林ヲ穿チ山ヲ踰エ「ハンゲヨウ」ニ至ル。則チ日漸ク西ニ傾ク。乃チ椴、五鬚松ノ林中ニ就キ椴葉ヲ以テ風雪ヲ防ギ以テ露次ス。此日行程六里許、雪石狩ニ比シテ多カラズ。夜ニ入り「トキコサン」「ラフニ」ノ二兒ヲ携ヘ来ル。

六日 晴、針、暁十度、晝二十度、夜一度。暁発、河ノ右岸ニ沿ヒ「クチャベシナキ」ノ林間ヲ穿チ左岸ニ移リ、「タツネウシニナラ」ヲ経テ「ベンゲシヨウ」ニ至ル。此際雁皮、温杉叢生林ノ如シ。距ル数里、或ハ東岸ヲ歩シ或ハ西岸ヲ行ク昨ノ如キモノ四タビ、「サンルベシベ」山ノ麓ニ至ル。則チ「サ

ツクサンペシヤペ」山其左ニ聳エ、二水■(缺字)方ヨリ来リ合ス。夏時土人往々獨木舟ニ棹シ来リ鱒ヲ漁スト云フ。従レ此地勢復タ峻隘ヲ極ム。或ハ樞木ヲ踏ミ、或ハ岩角ヲ攀ヂ行ク里許、「ジユングニナラ」ニ至リ、一大樹林ヲ穿チ折レテ西北ニ行キ、山ヲ踰エ午飯ヲ取ル。又行ク数丁山盡キテ林アリ。林盡キテ水アリ。水■(缺字)「ホロベツケシリ」ヨリ数里、峻嶺突兀左右ニ崛起ス、其左ナルモノヲ踰エ、大澤ノ畔ヲ歩シ、「ボンケネタイ」ニ至リ、林中ニ露営ヲ張リ以テ宿ス。此日行程六里、至ル處高山森林多く、五鬚松ヲ見ル。亭々参直目ヲ驚スニ足ル。而シテ其間溪流縦横、沼澤甚ダ多シ。夜ニ入りテ月色奇明、旅愁如^レ湧^ク。

七日 暁発。天色暗澹既ニシテ雪、針ヲ検スルニ零度ニ上ラズ。酷寒知ルベシ。北行数町森林アリ。之レヲ過グレバ平野アリ。「ルチシネシリ」ト云フ。行ク数町、高山峻峰重疊連亘迂(紆)餘曲折、其間ヲ行キ更ニ峻嶺ヲ踰エ一水ヲ得タリ。即チ「ポロナイ」(北見の幌内川)河ノ上流ナリ。則チ其右ニ沿ヒ西行数町、「ウロエンポロナイ」ニ至リ河ヲ渉リ、「ナイタイベ」ナル澤ヲ過ギ復タ河ヲ渉リ、「ベンゲホロビカリ」ニ至ル。

これによると、『山ヲ下レバ則チ「サンルベシベ」ナリ。則チ古ノ「カモイルベシベ」ニシテ』とサンルベシベが昔は『カムイルベシベ』と呼ばれていたことが記されている。これについて山田氏は『神(熊のことか?)・の峠道沢』の意』⁽¹⁷⁾と解釈している。次に中流付近の『キモイケウシ』という地名は、佐藤幸夫著『北風磯吉資料集』⁽¹⁸⁾によると「キモイケ」とは名寄のアイヌ語方言で野草採集をすることの意味で、ここでアイヌの人々はキト(行者にんにく)ヤトレフ(おおばゆり)などを採取していたのでこの地名がついたのであろう。上流の『サツクサンペシヤペ』では『夏時土人往々獨木舟ニ棹シ来リ鱒ヲ漁スト云フ』と同行のアイヌより、夏になると、時々アイヌが丸木舟に乗ってここまで溯り鱒漁をしていることを説明されている。この『サツクサンペシヤペ』は「サク・ルベシベ」ともいい、夏の峠道の意味で現在の幌内越沢のことである。ちなみにサンル川本流は「メナクシ・ルベシベ」、東を・越える・峠道沢と呼ばれていた⁽¹⁹⁾。一行は現在の幌内越峠の東側にある『ルチシネシリ』(路の・中央のくぼみ・山)⁽²⁰⁾という山付近を通り幌内川に下っている。

4 アイヌの伝説における「サンルベシベ」

名寄川筋のアイヌの間には、サンルベシベに関する次のような伝説がある。

①名寄アイヌの先祖

名寄は昔、相当大きな部落であったが、五、六代昔の頃、釧路から野盗が襲ってきて、部落中の者が皆殺しになったとき、或る家の者だけは、キトウシヌプリの近くの小山にあるイコロブ（宝庫）の中に、家内と子供とを隠して食料を与え、自分だけがオホーツク海岸の沢木に逃れ、「名寄の部落は滅びてしまったので、名寄へはもう帰らない」というのを、沢木の人たちに慰められ、北見の幌内に行って、そこで女や子供をもらって連れて名寄に帰り、名寄部落の再興をはかった。それが今の名寄部落の先祖である。それでどんなことがあっても、釧路の人とつき合ってはならないと言われていた。（名寄市内淵・北風玉二老伝）⁽²¹⁾

この釧路の野盗との争いについては、宝暦8年（1758）にキイタツ場所ノシャップアイヌ（根室アイヌ）が宗谷アイヌを襲撃したということ⁽²²⁾があり、そのことを意味しているのかもしれない。

②名寄を素通りする疱瘡神

海岸地方で非常におそろしがられている疱瘡の神様も、山奥に入るとそれほどおそれられていない。名寄部落の人達も、昔から疱瘡にはかからないといっている。それは昔から疱瘡の神様が天塩川を通り、名寄川に沿って北見へ行くときも帰りにも、サンルベシベというところを通って歩くが、何時も通る道だから、その途中の人達のところには何もしないから心配するなど、夢の中で教えてくれたので、名寄の者が他の地方へ行っていて、疱瘡が流行して来たら、疱瘡神に昔からの話をして、自分は名寄の者だという疱瘡にかからないという。

なおこの神様がとおるときは大い夜中で、その時は棹で舟を漕いで上って来るような音や、人のギャギャ話をする声がするが、出て見ると誰もいないので、川水が流れているばかりであるという。（名寄市日進・北風磯吉翁伝）⁽²³⁾

この疱瘡の流行について『名寄町誌』⁽²⁴⁾によると疱瘡は渡鳥が持ってくるかと伝えられ、この渡鳥というのは同じ頃蝦夷地に入ってくる日本人のことを転化したものと記されている。

5 まとめ

これら史料を基にサンルベシベについてまとめると、

- ① 天塩川流域とオホーツク海沿岸を結ぶ交通路の一つであり、しかも天塩川河口への道・石狩川への道に続く、アイヌの内陸交通路の一部であった。
- ② 名寄川筋アイヌの食糧である川魚や野草を採取する場であった。
- ③ 古い時期には名寄と幌内のアイヌの間で婚姻関係が成立する程、両地域の結びつきが強く、このこ

とは往来が頻繁であったとも考えられる。

- ④ 幕末には名寄アイヌは峠を越すが、幌内アイヌの集落まで行くことが無かった。

これらのことからサンルベシベは名寄川筋、幌内川筋のアイヌにとって、重要な道・地域であるが、幕末には夷人通路としての利用が無く、両地域のアイヌの交流が途絶えていたのである。

今回取上げなかったが、名寄川筋に3ヶ所、幌内川筋4ヶ所、音稲府川に1ヶ所のチャシがあり、これらもサンルベシベと何らかの関係があるのかもしれない。

また下川町では平成8・9年に名寄川とサンル川の合流点南側丘陵にある西町1遺跡を発掘調査したが、この調査で縄文時代の宇津内式土器が数多く出土した⁽²⁵⁾。オホーツク海沿岸に多く分布するこの土器を下川に伝えた人々も、ルベシベを下って来たのであろうか。

最後に、本文をまとめるにあたり、名寄北国博物館の鈴木邦輝氏、黒井茂氏、鈴木力氏、吉田清人氏には有益な助言、関係資料の閲覧をさせていただき、末筆ながら感謝申し上げる次第です。

<註>

- (1) 下川町史編纂委員会編 「下川町史」 下川町 昭和43年 132頁
- (2) 永田方正著 「(初版) 北海道蝦夷語地名解 復刻版」 草風館 昭和59年 461頁
- (3) 山田秀三著 「北海道の地名」 北海道新聞社 昭和59年 149頁
- (4) 知里真志保著 「地名アイヌ語小辞典」 北海道出版企画センター 昭和59年 116頁
- (5) 前掲書(4) 111～112頁
- (6) 前掲書(4) 117頁
- (7) 前掲書(3) 175頁
- (8) 前掲書(3) 175頁
- (9) 松浦武四郎著 「丁巳 東西蝦夷山川地理取調 日誌 下」 北海道出版企画センター 昭和57年 86～87頁
- (10) 高橋基著 「近藤重蔵の「テシオ越」ルート考」(北国研究集録第2号) 名寄市北国博物館 平成10年 20頁 図-11-Aを部分複写
- (11) 鈴木邦輝著 「近藤重蔵『天塩川川筋図』についてのメモ」(名寄市郷土資料報告第7集) 名寄市郷土資料室 平成4年
- (12) 田草川伝次郎著 「西蝦夷地日記」 石原求龍堂 昭和19年 132頁
- (13) 前掲書(9) 85頁
- (14) 前掲書(9) 84～85頁
- (15) 日塔聡編 「雄武町の歴史」 雄武町役場 昭和37年 192頁

- (16) 佐藤正克著 「關幽日記」『日本庶民生活史料集成 第四卷 探検・紀行・地誌(北辺篇)』三一書房 昭和54年 311～331頁
- (17) 前掲書(3) 149頁
- (18) 佐藤幸夫著 「北風磯吉資料集」(名寄叢書第6卷)市立名寄図書館 昭和60年 94頁
- (19) 前掲書(3) 149頁
- (20) 廣瀬隆人著 「雄武町のアイヌ語地名解」みやま書房 昭和63年 63頁
- (21) 更科源蔵著 「アイヌ伝説集」(アイヌ関係著作

- 集I) みやま書房 昭和56年 277～278頁
 - (22) 北海道編 「新北海道史 第9巻」北海道 昭和55年 65頁
 - (23) 前掲書(20) 278頁
 - (24) 名寄町誌編纂委員会編 「名寄町誌」名寄町 昭和31年 50～51頁
 - (25) 今井真司・古屋暁子・松本みどり著「西町1遺跡」(下川町埋蔵文化財発掘調査報告第2輯)下川町教育委員会 平成11年
- ※ 下川町ふるさと交流館学芸員



写真1 名寄川とサンル川の合流点



写真4 幌内越峠



写真2 象の鼻公園よりサンル3～7線方面



写真5 ルチシネシリ

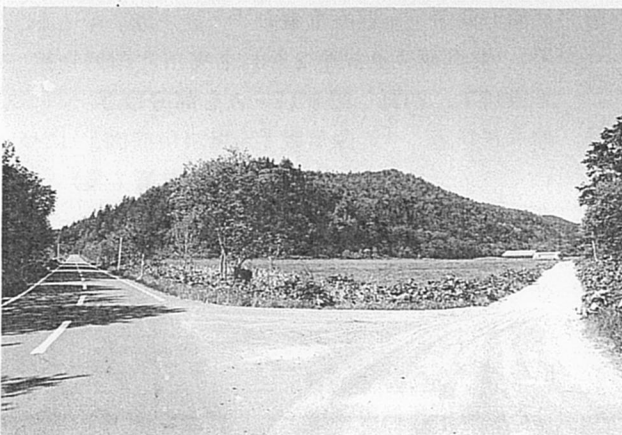


写真3 幌内越沢川(左)とサンル川(右)の合流点付近

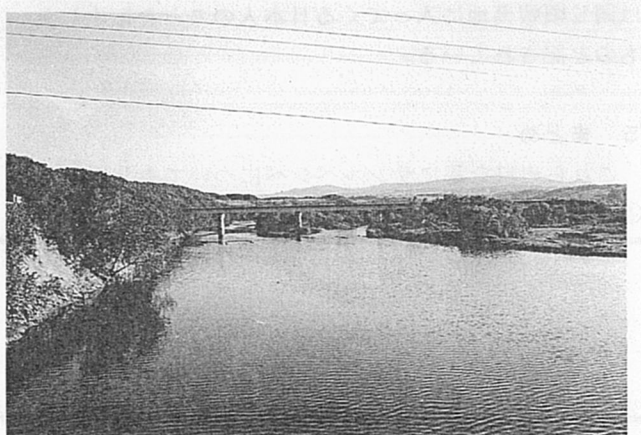


写真6 幌内川河口